銃火

（創刊号）

[redacted]

[redacted]

発行　「赤軍」政治宣伝部

付

統一された「赤軍」は、中央軍と人民革命軍の連合軍である。

この連合軍は、米日帝国主義に対する遊撃戦の着実な実践によって、新たな兵士を加え統一革命軍になるであろう。

連合軍は、遊撃戦を何よりも展開し、建軍武装斗争の中で、幾多の困難にたちむかい、犠牲を払って確立した軍事路線を深めるであろう。

軍事路線を深める中で、共産同赤軍派中央委員会と日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、それぞれの路線を検証し発展させ新党結成をかちとる覚悟である。

直、イデオロギーの問題については、今后整理し提起する事を確認する。

日本革命戦争の本格的開始に向けて
革命党建設ー「赤軍」強化、発展をかちとろう！

全国のプロレタリア兄弟諸君！

歴史的な「赤軍」結成にあたって、共産同赤軍派中央委員会、並に共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、次の様な統一アピールを採択した。

両組織は、互に六九年日本階級闘争の頂点の中で、プロレタリア武装闘争を追求し、大衆的暴力闘争を〝革命戦争〟へ発展させる努力を行なってきた。両組織は、六九年～七〇年に於る互の武装闘争が、日本プロレタリア階級の利害を代表し、世界のプロレタリア人民と固く連帯するものであった事を確認した。大阪戦争ー東京戦争ー愛知訪米阻止闘争ー大菩薩闘争ー米軍基地連続爆破闘争ーH・J闘争等、これら両組織によってかちとられた武装闘争は、世界階級闘争の根底的転換ー巨大な世界革命戦争の前進の渦に、日本階級闘争を巻き込み、発展させるものであった。

両組織は、一九七〇年一二・一八故柴野同志と遊撃隊によって担われた下赤塚交番襲撃闘争を媒介として、〝革命戦争の盟友〟としての契りを固めた。それ以降、半年有余にわたって両組織は銃奪取、連続資金奪取闘争を貫徹し、互いの経験、教訓を交換し合い、日本革命戦争の本格的開始に向けて前進してきた。そして、この半年余の「前哨戦」の展開の中で、両組織は次の様な確認点に到達した。

その第一は、七〇年～七一年に於るアジア大陸革命戦争の巨大な前進が、「全世界人民連帯せよ！」の合図と共に、戦略的反攻体制に入りつつある事から、日本革命戦争の本格的開始が、日本プロレタリア人民の責務であること。

第二は、米帝国主義を頭目とする世界帝国主義ブルジョアジーの戦略転換によって、日本帝国主義がアジアー世界反革命ー侵略ー抑圧戦争体制の重要な柱として乗り出そうとしている事から、日本革命戦争は、もはや不可避の、かつ一切のちゆうちょを許さぬものになっていること。

第三には、日本の先進的労働者、学生、農民、被抑圧諸階層、在日諸民族人民の中に、広範な革命戦争に対する共感、支持、支援の気運が盛り上りつつあること。

第四には、日本革命戦争の発展は、正しい建党建軍の路線の下に行なわれなくてはならず、両組織は総力を挙げて新党結成、革命軍の強化をかちとっていかなくてはならないことーそして、その為には、両組織は経験交流の範囲に止まることなく〝新党〟結成を前提とした軍事組織の統一、〝統一革命軍〟結成、諸大衆政治組織の統合をかちとらねばならないことである。

以上の確認点をもとに、両組織は統一革命軍「赤軍」の結成をかちとった。両組織は、マルクス・レーニン主義の世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁、永続革命等の原則的観点を踏え、中国、ベトナム、キューバの革命的教訓、アメリカ、中南米、アジア、中近東、アフリカ等、世界各地の武装プロレタリア人民の闘争に学びつつ、世界革命戦争の重要な一翼として、日本革命戦争を発展させる事を確認した。また両組織は、プロレタリア国際主義と、プロレタリアの武装に関する現代修正主義者の誤った学説と、その反革命的実践を打ち破り、日本プロレタリア人民を世界武装プロレタリアートの中軸に組織化してゆくことを確認した。両組織は、今後「赤軍」の前進によって切開かれ、「赤軍」の実践によって検証された教訓をもとに、〝プロレタリア革命党〟の真紅の旗を必ずかちとり、日本革命戦争の礎を築く大事業を完遂することを宣言する。

偉大な故ホーチ・ミン主席は、「闘えば必ず勝つ」決戦決勝の旗を大胆にかかげ、世界プロレタリア人民の行く手を指した。

我々は、勝利に向けて六つの旗を大胆にかかげて前進しよう。

一、世界共産主義建設、世界革命戦争勝利！
二、遊撃戦を貫徹し、全人民総蜂起へ！
三、党の軍人化、軍の中の党化をかちとり、革命党を建設しよう！
四、軍の平盤軍化　共産主義化をかちとり、「赤軍」を拡大、強化しよう！
五、蜂起ー戦争統一を全人民の権力へ！
六、自力更生の下、国際的革命人民と固く結合し、世界革命戦争に勝利しよう！

全国のプロレタリア兄弟諸君！

諸君は六〇年代後半以降の闘いの中で、帝国主義者にとってもはや戦争の道しか残されていない事をよく知っている。多くのアメリカの労働者、学生、青年が一何の為の、誰の為の戦争なのか」を見抜いた帝国主義者の戦争は、ベトナム人民がそうした様に「革命戦争」によってしか解体し得ない事も、諸君は知っているだろう。侵略・抑圧・反革命戦争は、帝国主義にとって決して政策ではない。それは、彼等の骨の髄まで喪み込んだ欲望である。戦後二〇数年にわたって、後進国人民は武装し、闘い、多くの血を流してきた。

が、我々は余りに永い間、これら後進国被抑圧人民の戦闘を見守ろに過ぎなかった事を、今深く反省しなければならない。

「銃をとって闘うのは所詮彼等だ」と、傍観していた我々の前に、日本帝国主義は巨大な軍事力をもって登場している。我々は余りに永い間、ブールサイダーだったので、もはや泳ぐ事ができなくなったのか？否、そうではない。日本プロレタリア階級は、かつても自ら銃を、武器をとって勇敢に闘った歴史を持っているし、その戦闘的な血は未だ涸りついてはいない。現に、我々は帝国主義の全ゆる弾圧にもかかわらず、プロレタリアートの闘い方、プロレタリアートの武装を獲得してきた。

全てのプロレタリア兄弟よ！

帝国主義の微笑に、決してまどわされるな。彼等が微笑すれば、その横面をなぐり、彼等が怒ればまたなぐればよい。

日本革命戦争は、一年や二年で勝利するものではない。五年、十年、いやそれ以上の年月と多くの犠牲の上にしか勝利することはないだろう。プロレタリア人民であればこそ為し得る、この持続した、粘り強い革命戦争に、今こそ立ち上り参加しよう。

世界プロレタリアート人民の闘う戦列に、日本人民の真紅の旗を打ちたてよう。

統一された「赤軍」と共に、世界革命戦争の勝利の日迄　前進せよ！

（一九二一年七月一五日、第三インターナショナル日本支部ー日本共産党が設立された。
五〇年後の今日、我々は「赤軍」結成を宣言する。
七・一五、この日は革命戦争を闘う全てのプロレタリア人民にとって、忘れ得ぬ日となるだろう。）

全国のプロレタリア兄弟諸君！

先進的学生、知識人諸君！

一九七一年七月一五日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並に日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。

この決定は、六〇年代日本階級闘争の革命的伝統を継承、飛躍させた画期的地平にかちとられた。この画期的地平とは、六〇年代後半の日本プロレタリア人民の偉大な国際主義的暴力闘争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」プロレタリア人民の軍隊に発展させた、「プロレタリア革命の魂」の復活ともいうべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党（革命左派）の「党の軍隊」として建設された中央軍、人民革命軍は、この画期的地平を自ら切り開き、歴史的な〃武装〃と〃遊撃戦〃を確立した。

大阪・東京戦争ー大菩薩闘争ー米軍基地連続爆破闘争ーH・J闘争こそ、日本階級闘争に於ける「プロレタリアートの武装した国際主義」の歴史的復権、革命戦争の大胆な登場をもたらしたのである。

一二・一八下赤塚交番襲撃闘争ー日本プロレタリア人民と、世界プロレタリア人民を固く結びつけた「淀」号H・J闘争後の、敵権力の気狂いじみた弾圧をはねのけて貫徹された、この英雄的闘争は、中央軍！人民革命軍を「革命戦争ー遊撃戦」の一本の赤い糸で固く

統一された「赤軍」（共産主義同盟「赤軍派」中央軍
日本共産党（革命左派）人民革命軍）
の下に結集し、徹底的に遊撃戦を闘い、
日本革命戦争の大飛躍を！

「赤軍」総司令部

結びつけた。ここにはじめて、「プロレタリア革命の利益＝革命戦争の利益」の為に、日本プロレタリア人民の利益の為に闘う「盟友」、新しい〃革命的団結〃がかちとられた。

産声をあげた「遊撃戦ー革命戦争」の赤い炎を守り発展させる勇気と確信をもって、二・一七銃奪取、二〜三月連続資金奪取闘争への前進が続けられた。それは、アジア武装人民の米帝国主義侵略軍、カイライ政府軍に対する大勝利と共に前進したのであり、アメリカ帝国主義の後退ー戦略転換ー日本帝国主義の進出、という新たな攻防関係の煮つまりの中で、帝国主義ブルジョアジーに対する「台風の目」であった。日本帝国主義権力は、この赤い炎を全力で絶滅せんとし、プロレタリア大衆はさまざまな形態でこの火を押し包み、その下に結集していった。六・一七機動隊殲滅戦、七・一〇三里塚ゲイト闘争といまや革命戦争は、日本プロレタリア人民の中にはっきりと定着しようとしている。中央軍ー人民革命軍の統一、この壮挙は、これら血と勇気によって色どられた闘いの歴史的総括であり、新しい出発である。

統一された革命軍は、プロレタリア世界革命の革命的伝統を打ち立てたロシア赤軍、中国赤軍にならい、その名称を「赤軍」とする事に決定された。「赤軍」は、世界各地で闘うプロレタリア兄弟の革命戦争とその利益を全く同じくし、プロレタリア世界革命戦争の一翼を担う。米帝国主義をはじめとし、日本帝国主義、西独帝国主義を支柱とする世界帝国主義ブルジョアジーの国際反革命戦争を絶滅し、全世界プロレタリア人民の真の解放ー世界プロレタリア独裁、世界共産主義建設！をかちとる事、これが「赤軍」の任務である。

プロレタリア兄弟諸君！

統一された「赤軍」は、日本帝国主義と闘う全ての人民、労働者、学生、農民、在日諸民族人民の闘争を支持し、その利益の為に闘うと同時に、アジア被抑圧人民に対する侵略・抑圧・反革命同盟を再編、強化しようとする日本帝国主義ー米帝国主義を打倒

すえ闘いを貫徹する。「赤軍」は遊撃戦を徹底的に闘い、革命戦争の大飛躍をかちとる中で、日本―アジア人民を分断、対立させる策動、アジア―アメリカ人民を対立させようとする全ての野望を粉砕し、日本。米帝国主義の侵略。抑圧。反革命軍を解体する。

「赤軍」は、プロレタリア独裁、永続革命、暴力革命、プロレタリア革命党の指導の下に、世界革命、レーニンが創造的に発展させたプロレタリア革命の原則的観点、毛沢東が提起した持久戦戦略とその陣型、及び遊撃戦争の戦略問題の教訓をもって武装されたプロレタリア軍隊であり、帝国主義ブルジョアジーを打倒する事―プロレタリア人民を革命戦争に組織する事―マルクス・レーニン主義を創造的に発展させる事、を同時一体的に闘いとることによって成長する革命軍である。

「赤軍」は、世界―日本革命戦争に献身的に参加しようとする全てのプロレタリア人民に、その門戸を解放している。

「赤軍」こそ、開始された日本革命戦争を代表する、プロレタリアートの「武器」であり、「赤軍」の成長こそ、日本革命戦争を前進させる「力」である。

武装し、闘うプロレタリア人民と一体化した「赤軍」は、遊撃戦の全面的展開の中で全人民総蜂起―日本革命戦争の勝利から、休むことなく米帝国主義打倒、ソ連社会帝国主義打倒―世界革命戦争勝利へ前進し、世界プロレタリア人民の軍隊＝世界赤軍の中核を担うだろう。

全国のプロレタリア兄弟諸君！

「赤軍」は、ここに最初のアピールを送る。

「銃火」と名づけられた赤軍機関紙は、これ以降かわることなく日本帝国主義権力との闘争の最先端から諸君の手元に送り続けられるだろう。

統一された「赤軍」の下に結集し、大胆に遊撃戦を斗い抜こう！
統一された「赤軍」の下に結集し、世界―日本革命戦争の勝利をかちとろう！

発行　「赤軍」政治宣伝部

（一）

革命戦争の巨大な前進！
強ぢられた「世界人民連帯せよ！」に応え、
遊撃戦―革命戦争に決起せよ！

全国のプロレタリア兄弟諸君！

七〇年代に突入して以降、世界革命戦争は巨大な、画期的な前進を遂げた。ベトナムを最前線とし闘われた世界革命戦争は、六〇年代後半の「反ベトナム侵略反革命戦争」の全世界的な昂揚と、仏、西独、米、日等、先進国プロレタリア人民の闘いの敗退の後も、七〇年春米帝！サイゴン政府軍のカンボジア侵略、ニクソン「ベトナム化」政策の推進に対して、致命的打撃を与える事から、巨大な前進を遂げた。中国のプロレタリア文化大革命の勝利と連帯した、ベトナム―カンボジア―ラオス人民は、たたちに革命的な統一戦線を結成し、中国、ベトナム民主共和国、朝鮮民主主義人民共和国の党と政府は、このインドシナ革命戦争の「根拠地」として体制を固めた。

「戦争終結を早める為」の作戦といわれたこの作戦に、二萬五千人以上の兵力を投入した米帝とカイライ政府は、何一つ戦果をあげ得ないのみならず、反革命同盟軍に参加する諸国の分裂、サイゴン―カンボジア両カイライ政府軍の対立、米軍の志気低下をもたらした。七一年、「攻勢的防禦」の為に行なわれた補給路切断の〝ラオス作戦〟は、同時にニクソン「ベトナム化政策」の成功を実証する筈のものであった。が、結果は二重三重の敗北をもたらした。米軍の空軍力の支援、援護の下にサイゴン軍機甲部隊はチエンポン目指して進撃した。ベトナム―ラオス―カンボジア革命勢力は、これを包囲、殲滅し、圧倒的な勝利をおさめたのである。

インドシナ人民の革命戦争は、この一年間飛躍的に強化され、経験の浅いカンボジア人民すら、今では立派な革命軍兵士として成長した。その士気の高さは、まさに天をつくばかりであり、米帝国主義と全てのカイライ軍を絶滅する迄は、決して前進を止めない気概にあふれたものである。インドシナ革命勢力は、この一年間の闘いの中で、今迄より以上に戦場で対決する敵軍兵士を組織し、その銃を敵自身に向けさせ、プロレタリア人民の世界的連帯を固める事で大きな成果をおさめた。「反戦兵士を撃つな！」の指令、ベトナム民主共和国、中国、朝鮮民主主義人民共和国を含めた「全世界人民連帯せよ！」の力強いスローガンこそ、この一年のすばらしい前進をはっきりと示している。

一方、致命的軍事的な敗北を喫した米帝はどうか。「ベトナム化政策は、米帝とサイゴン、カンボジアカイライ政府軍首脳との不信、対立を深め、兵士の士気を低下させ、脱走兵、反戦兵の続出をもたらしている。全ゆる最新兵器を投入しても、決して勝利し得ない戦争に於て、米帝国主義は「戦略的後退」を余儀なくされたのである。軍内部の慢性的な上官命令拒否、暴動、麻薬の流行は、米国内に於る経済危機―失業問題大の増大、基調産業の不振、財政政策とインフレーションの悪循環、一層のドル危機、あるいは政治危機―大統領独裁制の動揺、反戦世論の拡大、政治デモの激化、武装革命闘争の常盤化や社会危機―犯罪の増化、治安秩序の崩壊ETCと共に、米帝の戦略的後退を要求したのである。

我々、日本に於る革命戦争勢力は、六九年秋の敗北から、七〇年B・J闘争、一二・一八交番襲撃闘争を経て、革命戦争へ向けて前進した。それは、アジアの武装革命勢力と固く団結し、プロレタリア国際主義を自ら打ちたてる闘いであったし、また、世界帝国主義ブルジョアジーのホープとして登場せんとする日本帝国主義の鼻先へ、公然と「遊撃戦―革命戦争」を突きつける闘いであった。七一年二～三月の革命戦争前段戦は、銃・資金奪取闘争と、非合法「革命軍」建設として大きな成果をあげた。日本帝国主義は考え得る限りの弾圧を展開し、革命戦争の火を消そうとし

なか、被等の反革命暴力のエスカレートにもかかわらず、この革命戦争前哨戦は、六・一七明治公園爆破闘争による機動隊殲滅　七・一〇三里塚騒擾闘争として、日本プロレタリア人民に受け継がれ、発展している。とりわけ、六・一七闘争に於る機動隊殲滅は、ブルジョアジーのデマゴギーにもかかわらず一機動隊員を死亡させる、画期的闘いを切り開いたのである。六〇年代後半、とりわけ六九年の大衆的な暴力闘争の革命的伝統、その国際主義、暴力闘争、比類ない戦闘性は、こうして、世界革命戦争の巨大な前進と共に、日本に於ても革命戦争を担う力を生みだしたのである。

が、我々はこうした成果に満足する事はできない。アジアを中心とした世界革命戦争の最前線、大後方は、今やはっきりと戦略的反攻体制を打ちたてつつある。帝国主義ブルジョアジーと帝国主義プロレタリア人民を、上から下から揺さぶりつつ、すでに「世界人民連帯せよ！」の合図は発せられたのである。労働者国家のプロレタリア、人民は、もはや自国の社会主義建設のみに集中しているのではない。アジア各国の武装プロレタリア人民も、自国の革命の利益のみに集中しているのではない。ベトナム民主共和国、中国をはじめとして、労働者国家人民は、民族解放ー社会主義闘争と分ち難く結びつき、今や全世界の帝国主義プロレタリアートと団結しようとしているのであり、今日程、民族、国家を越えて「世界革命」への前提がかちとられている時はないのである。

闘えば必ず勝利するーベトナム人民のスローガンは、今や全世界プロレタリア、人民のものである。闘えば必ず敗れるーアメリカ帝国主義の経験は、全世界帝国主義ブルジョアジーの再び歩む道である。日本帝国主義は、まさにその道を歩もうとしている。欺瞞的沖縄返還をテコに、彼等は「総力戦」体制をつくり上げ、第二の米帝を演じようとしているのだ。

全国のプロレタリア兄弟諸君！

「プロレタリアはこの革命によって、鉄鎖のほかに失うべき何物もない。彼等の得るものは全世界である。」（マルクス）

「全世界人民連帯せよ！」の合図に呼応し、全世界を獲得する為に、今こそ遊撃戦ー革命戦争でもって日本革命戦争に決起せよ。アジアー全世界の武装プロレタリア、人民と連帯し、連続して日本帝国主義ー米帝国主義の心臓に遊撃戦ー革命戦争の矢を射ちかけよ！

（二）日米帝国主義の自衛隊沖縄派兵ーアジア侵略・抑圧・反革命戦争への総力戦体制を、連続した殲滅戦ー遊撃戦で打ち砕き、沖縄ー米ーアジアのプロレタリア人民と強固な連帯をかちとれ！

ベトナムを最前線とするアジア大陸の革命戦争が、一年有余の間にかちとった巨大な前進は、同時に米帝国主義の戦略的後退の開始でもある。

では、米帝の戦略的後退とは何か？彼等は、ベトナムから、韓国から、日本から兵員を後退させている。米帝は、もはや戦争を放棄したのだろうか。ベトナム化政策を押し通し、アジア人同志を闘わせるだけで、自らは再び戦場に出ないのだろうか。明らかに否である。米帝国主義の戦略的後退とは、その侵略・抑圧・反革命戦争の放棄では決してない。要は、従来の如く十の力で闘う事ができなくなった事、少い力で戦争を継続しようとする事に他ならない。従って、この米帝の新しい路線の実行には、それを可能とし、それを支える強力な味方が必要なのである。

ーアジア人をしてアジア人と闘わせしめるーこれが、米帝の新しい路線である。この目的実現に向けて、日本帝国主義をアジア侵略戦争の第一線に押し上げているのである。「沖縄の欺瞞的返還」をテコとする本土基地の沖縄化、核基地化、安保体制のアジア核安保体制への質的発展、強化は、まさにこの路線に基づいて行なわれているのである。日本帝国主義を韓国、台湾、ベトナム、カンボジア等のかいらいの盟主としてアジア侵略戦争に向け、その第一線に立って起用することは、米帝にとって至上であり、それは同時に、第三次大戦の危機をはらむものである。

日本帝国主義は、米帝国主義のこの様な要請と、自己の帝国主義的対外膨張の野望を満たす為に、積極的な準備を行なってきた。沖縄の欺瞞的返還、自衛隊派兵によって、アジアに対する前線基地を獲保し、沖縄を日ー米共同軍事基地として強化し、米ー日ー韓ー台ーサイゴンを主軸とする反革命軍事網を建設する事がこれである。すでに、日韓条約の締結以来、韓国には莫大な政府資本（援助）が投下され、更に民間長期資本も投入されている。米帝の韓国撤兵ー援助削減が、日帝のこの様な韓国進出によって支えられている事は、公然の秘密であり、日帝のこの様な韓国進出によって支えられている事は、公然の秘密であり、日帝のこの様な韓国進出によって支えられている事は、とはしていない。

が、日本に於る革命戦争の萌芽的開始と、アジアに於る革命戦争勢力の前進の同時一体的進行がもたらしたものは、驚くべき日帝の反革命体制へのスピード・アップである。

日帝は、「沖縄返還」協定調印の名の下に進められた米帝との「協議」で、自衛隊派兵日を繰り上げ、強力なミサイル部隊を含む派遣軍を、七二年三、四月～七月末迄に配備し終える事を公然化した。しかも、沖縄の圧倒的な米軍基地、対ゲリラ訓練所等はほとんど残したままで。と、続いて、米帝のドル危機ー経済危機を救う為に、米軍需物資の購入、中期債の購入を決定し、レアード国防長官来日を機に、沖縄核兵器の公然化、韓国への「沖縄の核は移さない」説明、自衛隊の装備強化、第七艦隊の一部肩代り、そして日ー米ー韓の軍事レベルの秘密な走査線一等を打ち出した。

かかる、日帝の軍事外交の急ピッチな展開は、末期症状の「佐藤政治委員会」が決定した「一兆円投入による日本経済の浮上」という、異常事態宣言、あるいは六・一七爆弾闘争ー機動隊殲滅戦に対する「過激派夜間集会、夜間デモ禁止」、機動隊の重武装化という革命戦争への全面対決路線、その他医療保険問題、米価問題、公害問題、三里塚弾圧、前代未聞の国鉄労働者大量処分ＥＴＣ、枚挙すればいとまのない位の数々の動行と期を一にしたものであり、彼等のアジア侵略・抑圧・反革命戦争に賭ける意欲を物語るものである。

この事から、ただ一つの結論のみが導びかれる。それは、日本帝国主義は、もはや侵略・抑圧・反革命戦争以外、進むべき道をもたない事である。この事は、「第二の米帝の道」ー敗北への道を辿るという事と同じ意味であり、「日本だから何とかやっていける」事では決してない。米帝国主義て、そうであった如く、又現代帝国主義の例にもれず、日本帝国主義も巨大な生産設備、生産力を誇り、過剰資本を輸出してきた。だが、かつては「高度成長」を遂げた日本帝国主義は、今や自らが引き起こした慢性的インフレの中で四半期に集中した一兆円の財政投融資をカンフル注射しなければ、生きていけない有様である。巨大な三菱独占をはじめとし、重化学工業独占は、一層経済の軍事化を要求し、政府のテコ入れ金を引きずり出しているし、生産点内部に於る反革命部隊建設に余念がない。

かくて、巨大な生産設備ー生産力を日本プロレタリア人民の血と汗で築き上げた今、日本帝国主義はその資本主義的発展の道を、軍需生産ー統制経済に求めざるを得ず、侵略・抑圧・反革命戦争の泥沼に突進せざるを得なくなった。これ迄巧妙に陰し続けた日本ーアジア人民の分断支配を、「善隣外交」→「入管体制」に進め、沖縄人民を基地に縛り付けたまま支配し、ＡＳＰＡＣ外交でアジアへの政治的発言力を獲保しようとする日帝の野望は、米帝との一層緊密な協力体制の故に、日本ーアジア、沖縄、米の全てのプロレタリア人民の憎悪の的になっている。

末期的「佐藤政治委員会」は、引退の花道どころか、まさに「毒喰わば皿まで」と、全ての悪事を一挙に引き受け、内外から多くの手痛い反撃をくらった。しかし、我々はいわゆる「ピンポン外交」をはじめとする中国外交の成果や、自民党佐藤体制の崩壊を喜びとすれ、それに同調する事は決してできない。

何故なら、日本帝国主義とその親衛隊ー機動隊、自衛隊を真に解体できるものは、日本プロレタリアートの武装勢力のみであり、我々とそれを為さねばならないからである。六九年当時から、敵の攻勢は一段と暴力化、総力化し。組織破防法の実態化に迄進んでいる。六・一七が示した機動隊殲滅戦争は、七・一〇三里塚マイト闘争と共に、かつてない「当然である」「支持する」共感をもって、プロレタリア、大衆に迎えられた。

アジア革命戦争勢力と結合し、この日本プロレタリア、大衆の革命戦争への共感の昂揚に依拠して、我々は総力を挙げて、日本帝国主義のアジア軍事侵略、日ー米反革命強化を打ち砕くであろう。機動隊を全ゆる機会に殲滅し、全国的な治安体制網を寸断する闘いの持続と共に、我々は今や「自衛隊」どの全面対決へ進もうとしているのだ。この闘いは、自帝との総力戦を意味するのみならず、我々と沖縄人民の「自衛隊粉砕」「米軍解体、米軍基地解体」の闘いとを固く結びつけねばならない事ー換言すれば、日本ー沖縄プロレタリア人民と自衛隊兵士、米軍兵士の革命的連帯の問題をも突きつけている。すでに沖縄で反戦兵士と沖縄大衆の公然たる交歓が進んでいる事は、この様な革命的連帯にとって非常に有利な条件がある事を示しているし、自衛隊に対する叛軍闘争の展開は、自衛隊内「赤軍兵士」の出現を現実的な問題としている。

全国のプロレタリア兄弟諸君！

迫りくる自衛隊沖縄派兵ー日帝のアジア侵略・抑圧・反革命戦争への総力戦体制作りを断固粉砕せよ！　政治ー治安警察ー機動隊殲滅戦ー遊撃戦を持続・発展させ、自衛隊ー米軍解体へ前進しよう。

「赤軍」の旗の下、日本ー沖縄ーアジアー米プロレタリア人民の巨大な連帯をかちとろう！

(三)

政治・治安警察・機動隊・米軍に対する本格的殲滅戦ー遊撃戦を開始し、世界革命戦争の一翼を担おう。

七〇年一二月一八日、柴野同志等によって担われた英雄的な交番襲撃闘争以降、我々の日本革命戦争〝前哨戦〟は、常に世界革命戦争の最前線、アジアの闘いと共に歩んだ。この大陸革命戦争の前進、国境を越えた武装プロレタリア人民の団結の前進は、日本革命戦争に於る世界的、戦略的優位性として、我々に有利な条件である。更に、日ー米帝国主義の気狂いじみた共同反革命体制再編、強化の動向は、全ゆる所で彼等の政治的、経済的統治能力の破綻を招き、プロレタリア人民を決起させる役割を果している。これまた、我々にとって非常に有利な条件である。

しかし、我々は未だこれらプロレタリア味方階級に有利な条件を、充分に組織し得てはいない。我々の闘いは、未だ少数の者の闘いであり、味方階級全体を団結、組織したものになってはいないのである。

だが、一二・一八、二・一七、二〜三月連続闘争は、我々に貴重な教訓を与えた。

その第一は、革命戦争の勝利は、何よりも持続した敵に対する遊撃戦にある事であり、我々はその様な、連続した持続的な殲滅戦ー遊撃戦を充分闘えるし、又闘わねばならない、ということである。このことは、我々が武装し、敵ブルジョアジーの全国的な追撃・攻勢の中で、それらの武器を手足の様に使いこなす訓練を経る中で、増々強固になっていった。

第二の教訓は、我々の武器、資金奪取は、「敵から奪い、武装する」革命戦争の原則にかなったものであり、我々は今後もどんどん敵から奪い、味方の武装を強化しなければならないという事である。

「武器は自家製造するべきだ」などというタワ言で、日本プロレタリアートをあざむこうとするエセ左翼主義者は、いつ迄たっても闘えない合法カンパニア主義者であり、プロレタリアの武装を解除しようとする反革命的役割を果している。敵から奪う事なしに、味方を武装した革命戦争など、世界の歴史上どこにもない。成功した革命、勝利している革命戦争は、全てその武器を敵から奪い、その武器で敵を殲滅しているのである。

我々は、すでに銃を奪取し、武装した。プロレタリア革命軍こそ、敵から奪った銃を敵の心臓に射ち込む事で鍛えられ、敵から奪った銃を味方の武器とし、団結する軍隊である。六・一七「殲滅戦」、七・一〇爆弾闘争を継承し、我々が敵から奪った銃で本格的な敵殲滅戦ー遊撃戦を開始する時、日本革命戦争は、その本格的幕開け、開始の地平に突入する事を、我々は誇りと自信をもって宣言しよう。

第三の教訓は、革命戦争はプロレタリア大衆の創造的参加なしには発展し得ないこと、言いかえれば、革命軍の軍事的勝利は、プロレタリア大衆の政治的、組織的攻勢に不断に転化され発展してゆくものであり、この事を抜きに革命戦争総体の発展はあり得ない、という事である。

我々の闘いに対して「大衆から浮き上がっている」「大衆から孤立している」との声が聞かれる。たしかにその通りである。しかし、その事をもって、現在の日本プロレタリア大衆の革命戦争への創造的な参加、支持の気運を否定するのは、敗北主義者である。我々が孤立していたのは、学生、青年労働者を先頭とする日本プロレタリア大衆に「革命戦争など無縁だ」という傾向が支配的だったからでは決してない。五・一九闘争、五・三〇闘争、六・一五〜一七闘争、これら、最近のどの街頭闘争をみても、どこでも「花火」や「パチンコ玉」や「手製爆発物」を武器とし、闘うとする大衆が数多く参加している事実をみることができる。問題は、我々がプロレタリア大衆のこうした戦闘性、創造性に徹底的に依拠し、これを先導し、組織化する事が不充分であったということである。

「調印阻止決戦」「三日間戦争」と叫び、今また「批准阻止決戦」などと相も変らず〝萬年決戦論〟を唱えた八派は、六・一五闘争をもって解体した。六九年秋の敗北ー一時的後退以降、一部の生産点、拠点とじ込もり主義の諸君を除いて、反帝諸闘争を闘った多くの諸君は、未だ八派の指導下にあった。合法主義—カンパニア主義者として古い型の闘争、形態を固守しようとする八派の諸君は、日本帝国主義が一方で革命戦争派の絶滅を、他方で人民戦線派ー自主防衛派に対する政治ヘゲモニーの調整、操縦を行ないつつ、プロレタリア大衆の武装勢力に対する分断支配を行なっている事実に全く気がつかない。日本共産党（宮本修正主義一味）が、「プロレタリア独裁」を「プロレタリア・デイクタツーラ」に歪曲し、はっきりと議会主義者ー社会排外主義者に転落している中で、「革命的議会主義」の名の下に、それに追随する傾向さえ表われてきている。組織破防法の実態化を見てもわかる通り、権力の〝非合法化〟は、革命武装勢力に対するそれであり、合法主義者ー人民戦線派は、「弾圧反対」「武装闘争も反対」の矛盾した、だが彼等にとっては一貫した主張で、プロレタリア革命戦争に敵対する立場をとっている。八派の解体ープロレタリア大衆の様々な武器への接近、武装闘争の試みは、こうした合法カンパニア主義ではもはや闘い得ない事が、一層大衆的に鮮明になり、定着化してきた事を示している。

我々はこの五、六月闘争の中から、すでに幾つかの先進的なグループが、我々と共に、あるいは独立で非合法的活動を創出しようとしている事を知っている。非合法闘争ー軍事闘争は、我々だけのものではなく、今や着実にプロレタリア大衆のものになりつつある。こうして、徹底してプロ大衆の革命戦争に対する豊かな創造性に依拠し、非合法闘争を全ての闘うプロレタリア人民のものにしてゆく事が、我々の第三の教訓である。

教訓の第四は、敵は政治、治安警察、機動隊のみならず、今や自衛隊ー米軍をその射程に入れていかねばならない事である。我々は、まだ「機動隊」に堪する縦横無尽の殲滅戦すら展開してはいない。

では、自衛隊ー米軍に対する軍事闘争は、無謀であろうか。時期尚早であろうか。我々がもし何の準備もなくそうすれば、明らかに無謀である。しかし、我々が第一、二、三の教訓を生かし、それを実践すれば決して無謀でも時期尚早でもない。また、機動隊に対する我々の闘いと、自衛隊ー米軍に対する闘いは、決して明確な段階をもって区切られるものではない。佐藤政府は、半年有余に迫った自衛隊沖縄派兵で、機動隊の重武装化と共に「自衛隊の発砲すら辞さない」態度を固めている。日本の革命戦争にとって、その初期から自衛隊ー米軍に対決しなければならないことは、アジアの大陸革命戦争との不断の連帯、国内でのアジア人民分断支配体制の打破と共にその特殊性の一つであり、必ず味方の強化に転化できるし、又そうしなければならない条件である。自衛隊ー米軍に対する軍事的殲滅戦は、「反戦兵士」「赤軍兵士」の組織化と不断に一体的に進められなければならない。多くの反戦兵士、赤軍兵士の創出、組織化は、世界革命戦争の重要な一翼を担い、その前衛部隊として発展する日本革命戦争に、プロレタリア国際主義の背景を与えるものであり、不可欠の闘いなのである。

いうまでもなく、帝国主義の侵略・抑圧・反革命体制の有機的構成部分に転落した日本共産党＝宮本現代修正主義集団や、その国際的親玉・ソ連社会帝国主義は、こうしたプロレタリア国際主義の生成・発展に敵対する全ゆる闘いを組織しており、我々の日ー米帝国主義打倒、自衛隊ー米軍殲滅戦は、かかる現代修正主義者の解体を通してしか実現し得ない。

全国のプロレタリア兄弟諸君！

世界革命戦争の巨大な前進が呼び起こし、アジアをはじめとして世界各地で闘うプロレタリア・人民が要求している先進国ーとりわけ日ー米の革命戦争は、歴史的な革命戦争の全ての経験、教訓を学んで出発し得るのみならず、日本帝国主義の米帝国主義との共同反革命強化、アジア侵略ー抑圧ー反革命戦争の進展期に産声をあげることによって、世界革命戦争の本格的な戦略的反攻を準備、推進する重大な役割を演じようとしている。

侵略ー抑圧ー反革命戦争によってしか生き続ける事のできない帝国主義ブルジョアジーを、歴史の博物館に葬り去る事業を、我我こそ担わねばならない。

革命戦争の持久戦ー遊撃戦の原則を堅持し、勝利の日まで「赤軍」と共に前進しよう！

永遠の平和の為に、プロレタリア人民の真の解放の為に！

「決戦決勝」の旗を掲げ、遊撃戦を開始せよ！

全国の労働者、学生、市民のみなさんへ！

「赤軍」組織部

日々、反帝諸闘争を闘っておられる先進的労働者、学生、市民のみなさん。

日本階級闘争の革命的伝統の中から誕生した「赤軍」は、諸大衆戦線で闘うみなさんの参加を呼びかけます。

「赤軍」は、まさに歴史的な世界革命戦争の転換点に生まれました。カンボジア越境作戦ーラオス国境作戦と、引続いて米帝国主義侵略軍ーサイゴン・カイライ政府軍を打ち破り、燁やかしい勝利をおさめたアジア人民が、「全世界人民連帯せよ！」のアピールを発したとき、日本武装闘争が、七〇年一二・一八闘争、七一年二～三月銃・資金奪取闘争から、六・一七爆弾闘争、七・一〇三里塚爆弾闘争へと受け継がれ、革命戦争の本格的開始へ突入しようとしています。まさにその様なときに生れた「赤軍」は、世界的な味方階級の前進と、それがもたらした敵、帝国主義ブルジョアジーの戦略転換という、攻防関係の一層の飛躍、世界革命戦争の新しい地平の中で、日ー米帝国主義のアジア侵略・抑圧・反革命戦争の再編、強化に向けて、大胆な前進を開始しようとしているのです。

こうした、全世界的な敵と味方の攻防関係の変化は、日本の全ゆる政治・社会状況にはっきりと表われています。

四選ー内閣改造後の佐藤内閣は、急ピッチで自衛隊沖縄派兵東日米・韓軍事体制を固める一方、外交に於る中国問題、内政に於る医療保険問題、参院問題等、さながら満身創衣の如くであり、没落する階級、転落しつつある権力の姿を浮かび上がらせています。

味方の戦線に於ても、こうした変化は同じです。大衆戦線の中で、従来「武装闘争」を口では言いながら、実際には否定する傾向や、全く否定する傾向は、大衆的な突き上げによって崩れ去ろうとしています。

叛軍闘争の戦線では、各基地叛軍闘争や裁判闘争から、自衛隊沖縄派兵を目前にして、派兵を本当に阻止し得る闘い、逆にプロレタリアートを武装する闘いの必要性が叫ばれ、また返還協定調印阻止や批准阻止の中央実力闘争のみではなく、各地でのゲリラ的闘争、熊本ー沖縄での現地闘争の強化が要求されています。自衛隊員に武器を捨てさせる事から、武器を奪取させ、〝赤軍兵士〟として味方の戦列に組織しようとする動向も表われてきています。

入管闘争に於ては、入管法の国会審議をめぐる闘争、課題ごとの闘争、地域闘争体制が定着化してきた段階で、プロレタリア国際主義と、プロレタリアの武装問題が、決して切り離せない問題であり、武装した国際主義、革命戦争を建設する国際主義を打ちたてようという主張が行なわれてきています。

三里塚の闘争では、周知の如く、拠点を持った地域ゲリラ闘争の偉大な典型がつくられ、ダイナマイトによる爆破や、焼き打ち闘争が常態化しています。

こうして、現在の日本の政治状況は、上層も下層も、世界革命戦争の前進と、新たな攻防関係の煮つまりを反映して〝転換点〟にさしかかっているのです。

「赤軍」は、こうした転換点に誕生し、日本革命戦争を先導せんとするプロレタリア階級の軍隊です。現在の日本階級闘争の新たな煮つまりーブルジョアジーの新たな攻勢に対して、武装したプロレタリア国際主義のみが勝利を得ることができます。国際的な緊密な協力体制をとる帝国主義ブルジョアジーを、国家の主人公、支配階級の座から引きずりおろし、ひと握りの世界的な没落階級連合に追いつめ、これを打倒するには、何よりも味方階級の国際的武装、団結が必要だからです。帝国主義ブルジョアジーは、

一見世界的、歴史的な立役者に見えますが、その実、世界武装プロレタリアートの攻勢の前に着実に受動的な敗退の道へ追い込まれているのです。従って、日本革命戦争ー大小のゲリラ戦を創出し、帝国主義ブルジョアジーとその味方を殲滅する軍事闘争は、現に闘われている諸党争の全ての利益を代表するのみならず、世界プロレタリア人民の利益をも代表するのです。通算して一年有余の経験しか持たない「赤軍」は、未だ弱少勢力です。しかし、この弱少勢力こそ、帝国主義ブルジョアジーを真におびやかすものであり、彼等との最も先端的な攻防を担っているものであることは、すでに実証されています。

全国の大衆戦線で闘うみなさん！

我々「赤軍」は、遊撃戦ー革命戦争に対する参加、支援、支持を強く呼びかけます。

遊撃戦ー革命戦争の火の手を、全ゆる戦線に押し広げ、プロレタリア人民の「非合法闘争」を全ゆる職場、地域、拠点に深める闘いは、「赤軍」と諸君との固い連帯の中でかちとられるでしょう。遊撃戦ー革命戦争、とりわけ先進国である日本での革命戦争にとって、武器、輸送力、食糧、資金、アジト等の大衆的支援、継続した補給は、不可欠なものです。全ゆる合法ルートを利用しつくし、同時に非合法活動スタイルをも作っていく事は、我々「赤軍」の死活にかかわる問題なのです。

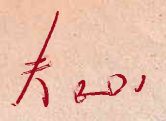
日本革命戦争の歴史的開始に向けて、全ての力を、全ての物資を、全ての闘う能力を、「赤軍」に集中し、赤い網の目をはりめぐらそう！

全ての労働者、学生、市民のみなさん！

我々の闘いは、多くのみなさんが支持し、支援しているベトナムの闘いと同じ様に、帝国主義の侵略・抑圧・反革命戦争を解体させる闘いです。日本帝国主義ブルジョアジーが、今ベトナムに行っていないからということで、我々はこの不可避の戦争を坐して待つわけにはいきません。日本で革命戦争を起こすことはアメリカ帝国主義にも痛打を与え、ベトナム侵略戦争を早期に終らせる事でもあるのです。我々と日ー米帝国主義との闘いは、目に見えない闘いといっていいでしょう。我々は、機動隊や検察や公安などと日々闘って、彼等への殲滅戦ー遊撃戦を準備します。敵は、それを準備過程でつぶそうと、市民社会の全ゆる所に入り込み、労働者、学生、市民をドーカツし、スパイを強要したり、ブルジョア法でも許されていない無差別逮捕、捜索、検索を乱発しています。ブルジョア・ジャーナリズムに圧力を加え、さまざまなデッチ上げ情報を流すのも彼等の手なのです。

我々「赤軍」は、みなさんにこの目に見えない闘いに対する支持、支援を訴えます。未だ、我々の闘いー日本革命戦争を理解し得ない、あるいは、支持する事を迷っている人達は、敵権力に対しても「厳正の中立」を守っていただくようお願いします。敵権力にいかに脅かされても、「スパイ」になり下がる事は拒否できますし、又、そうすべきなのです。この好意ある中立が守られる限り、我々は決してどの様な市民に対しても迷惑をかける事はないでしょう。

反帝諸闘争の全大衆戦線の闘いを、日本革命戦争の赤い火へ集中しよう！

日本革命戦争の勝利萬才！

世界革命戦争の勝利萬才！